



110

山形県寒河江市からサクランボ便り

金丸弘美

食総合プロデューサー

山形県の中央部にある寒河江^{さがえ}市七日町の工藤俊明さんから、毎年、可愛らしいサクランボが届く。寒河江市は、サクランボの産地として知られるところ。いただいたのは佐藤錦。緋色^ひ、薄紅色^{うすにじ}、珊瑚色^{さんご}など、さまざまな色合いが織りなし宝石のように輝いてみえる。

サクランボは、もう10年以上送ってくださっている。工藤さんとは、いつ会ったのだろうと思って尋ねたら、山口義之立教大学教授（現在は名誉教授）の中小企業サポートネットワーク「スモールサン」主宰のセミナー。場所は山形市にある「山形県生涯学習センター遊学館」。これまでも山形には何度か訪れ、山形県の農村の活動の記事を書き、書籍でも紹介したりしていたら山形県か



大玉で美しい輝きをみせる『やまがた紅玉』

ら声がかかり「山形伝統野菜PR大使」を拝命することに。しかも今年は、サクランボや西洋梨が栽培されて「やまがたフルーツ150周年」という記念の年。さらに今年も山形市「遊学館」での「スモールサン」のセミナー講師で呼んでいただくこととなり偶然とは思えない。

「勤めていた時、経営の勉強をしたくて参加したんです。山形の若い2代目、3代目が集まり面白かった。2次会も参加しました。食と農業の地域活性化の話に感銘しました。そのあと花巻市での講演にも行きました」と工藤さん。

さらに農村振興事業を手掛ける（一財）都市農山漁村交流活性化機構（まちむら交流きこう）のセミナーも行かれたそうで、その時、参加者に工藤さんの実家の近くの方がいらして巡りあい畑を借りることもあったという。

当時、工藤さんは工場で機械関係の仕事をしていました。しかしサクランボ農家をどうしてみたいと兼業農家となり45歳から親の手伝いを始め定年で専業農家となった。

「婿^{むこ}で入った。もともと農家生まれ。サクランボは小さい頃から親しんだ。好きだった。手をかければかけるほどおいしくなる。喜んでもらえる。勤めながらサクランボを栽培し、お客さんに差し上げると、とんでもなく喜ばれた。『山形はサク

ランボだね、美味しい、美味しい』と言われた。なんか、それで嬉しくなった。農地もある。農業を辞めるのはもったいない。サ克蘭ボをやりだしたら、やればやるほどいいものができる。最初の頃は、6次産業の地域のリーダーを目指した。しかしサ克蘭ボ栽培を始めたら作物が面白くなった」

6次産業とは、当時、盛んに言われ始めた政策で、1次産業の農業と、2次産業の加工、3次産業の流通・販売・サービスの、1・2・3を掛け合わせると6になることから付いた造語。農業の付加価値を高めるための取り組みだ。

しかし工藤さんは、サ克蘭ボ栽培に夢中となったのだという。

農業を継いで8代目。畑は1ヘクタール。サ克蘭ボは0.5ヘクタール。ワイン用の葡萄も0.2ヘクタールを手掛けている。あとは食べる野菜を栽培している。家族は妻と子供3人。お子さんは、今は40代で、週末に手伝いに来てくれる。

サ克蘭ボは6種類を栽培。メインは甘酸っぱい『佐藤錦』。他に若い人と子供に人気の甘い『紅秀峰』。大玉の『やまがた紅王』。これは特産ブランド化しようと生まれたもので一般販売は3年前。大粒で噛み応えがありさつぱりした甘み。まだ量は少ない。ほかに、ハート型で中まで赤い『紅さやか』。それに古くからの品種『ナポレオン』『高砂』を栽培している。

「サ克蘭ボの時期は、5月から6月、7月上旬5月に『紅さやか』、6月『佐藤錦』、『高砂』、6月末『やまがた紅王』、『紅秀峰』、『ナポレオン』。うちでは作っていないが、7月に『紅きらり』、『大正錦』など、20種類以上あります」

話を聞いたら、実にきめ細やかに栽培がされている。

サ克蘭ボもぎを喜ぶ孫の琉乃君



「肥料は、夏、秋、春にあげる。サ克蘭ボ用の肥料。作物に応じて配合。有機物を主体としたもので化学肥料は少ない。土地に合わせた肥料です。剪定は、冬、夏、秋、3回やる。枝を切つて、すつきりさせ、日当たりをよくする。日があたるといいものとなる。1年くらいかかる。収穫後の7月が大事。収穫が終わったあとは木が弱っている。栄養補給をさせること。窒素を入れる。あと病虫害の防除。夏のじめじめしたときはダニがでたりする。温度管理が大切。7月は暑い。木の上に遮光ネットを張り、熱くならないようにする。双子果といって1本の軸に1個の種が分裂する。商品にならない。メンテナン스가大切。枯れ葉病、褐色せん孔病（黄変落葉）には、水の管理をする。温暖化。影響ある。毎年、暑くなっている。北海道で作れる。青森など、リンゴの代わりに作るところもある」とのこと。

私たちは、美味しい時期のサ克蘭ボをいただくわけだが、1年を通して、丁寧な環境づくり、手入れ、管理がされていると知った。

収穫には5人、箱詰め5人の人たちに手伝ってもらうという。出荷は、農協、地域の市場、個人の贈答、それに年間70万人が来るという地域の人気の直売所「JA直売所 アグリランド産直センター」に出している。また来年にはサ克蘭ボの素敵な輝きのお便りが届くに違いない。